セックス／ジェンダー／セクシュアリティの相互関係の再定式化
－　J・ラプランシュによるフェミニズムの理論的再検討－

○　古川直子（京都大学）

1 目的と方法

かつてジェンダーという概念は、生物学的性別であるセックスに対抗する社会的な性別としてフェミニズム理論に導入された。しかし近年の研究ではすでに、生物学的セックスを社会性の外部に温存すること自体に疑義が呈されてきた。このようなジェンダー概念の理解は、生物学的性差（セックス）がジェンダーという社会的性別にどの程度反映されるかという問題構成そのものを決定的に転換した。それは、そもそもセックスを有意味な差異として見出す視線のあり方そのものを、ジェンダーという語で問い直すことであるからだ。しかし、セックスに由来する快や欲望としての既存のセクシュアリティ理解は、このようなセックスとジェンダーの間の概念的断絶をなだらかに繋いでしまっている。このような現在の理論的困難に対する新たな視点を提起するものとして、本報告ではフランスの精神分析家 J・ラプランシュによる近年のフェミニズムをめぐる批判的議論を紹介し、その意義を検討する。

3 結果と結論

J・ラプランシュはフランスで最も影響力のある精神分析家の一人として、近年では英語圏でも急速に注目を集めつつある論者である。彼は、初期フロイトの誘惑理論の枠組みを継承しつつ展開することで、独自の理論（「誘惑の一般理論」）を提唱するが、ラプランシュの理論的立場は、セックス/ジェンダー/セクシュアリティの関係の再定式化という論点において示唆に富むものである。彼は、セックスという生物学的な差異をジェンダーの基礎づけとして捉える見方を批判し、子どもにとってのジェンダーという区分が、あくまで大人によるジェンダーの「割り当て」(assignation)として到来することを論じる。養育者や周囲の大人は、ジェンダー役割についての知識と期待をもって子どもに相対し、それは言語的／非言語的メッセージとして子どもに差し向けられる。ラプランシュによれば、子どもにとって、それらジェンダーの割り当ては大人側の無意識というノイズをふくむ「謎のメッセージ」であり、セックスとはこの謎を拘束するためのコードとして利用される差異である。このような視点は、これまでのセックス／ジェンダー／セクシュアリティの相互関係をめぐるフェミニズムの議論を、根底から覆しうる新たな視点を導入しうるものである。